

令和6年度 学校評価アンケート 結果・現状分析及び今後の課題

よくあてはまる 4点
どちらかといえばあてはまる 3点
どちらかというにあてはまらない 2点
あてはまらない 1点

評価
A：4.0～3.5 B：3.4～2.9 C：2.8～2.3
D：2.2～1.7 E：1.6～1.0

領域	評価の観点	№		実践目標	平均	評価	現状分析	今後の取組み・改善策
組織運営	学校運営全般	2	教	本校は、生徒・保護者の期待やニーズに応える教育活動を行っている。	3.4	B	・昨年度と同様に、生徒、保護者は本校の学校生活全般に概ね満足しており、高い評価を得ている。特に、保護者の「姫路東高校に入学させて良かった」という項目については、3.7ポイントと突出して高い。各教員の保護者や生徒に対するホスピタリティの高さも影響していると考える。一方、教員の働き方改革はさほど進んでいない現状である。教員の超過勤務時間は昨年度に比べて減少傾向にあるものの、まだまだ適正化は図れていない。	・本校の掲げるスクールミッションやスクールポリシーを発信し、「探究活動」を中心に据えた、生徒主体の学びの充実をさらに進める。 ・コロナ禍以降、学校行事の精選や見直しが進む中、教育活動の効率化を図り、業務改善に尽力していく。 ・各専門部の専門性を高め、年次との協働を進めることで、学校全体の教育力を高めていく。
			生	姫路東高校での学校生活に満足している。	3.5	A		
			保	姫路東高校に入学させてよかった。	3.7	A		
情報提供	開かれた学校づくり	3	教	ホームページや年次通信等を通じて、家庭や地域に情報を発信している。	3.6	A	・教員と生徒の評価は昨年度に比べて、高くなっている一方、保護者の評価は昨年度に比べ下がっている。これは、学校行事やＳＳＨ事業については頻繁に情報を更新しているが、部活動によっては、更新がなされていないものも見受けられ、古い情報のままの部分が残っていることも原因の一つと考えられる。	・年度末にすでに、各部署、部活動顧問に呼びかけ、積極的に活動状況をHPにおいて発信するように指示をしている。来年度以降も継続的に情報を発信していくように呼びかけていく。 ・保護者からの生徒の欠席連絡は、現状、保護者からの電話連絡であるが、業務改善と保護者負担軽減の観点から、メールシステム化などで行えるように検討を進める。
			生	本校は、ホームページや年次通信などを通して、さまざまな情報を提供している	3.2	B		
			保		3.2	B		
キャリア教育	進路指導	4	教	本校は、キャリア教育（職業ガイダンスセミナー・企業訪問など）が充実している。	3.5	A	・職業ガイダンスセミナーや企業訪問を通じて、多様な職業の種類や仕事の内容を学び、職業的な視野を広げている。 ・進路講演会、モチベーションアップセミナー、合格体験講話を通じて、志望大学・学部選択の留意点や最新の入試動向など大学受験に必要な情報を提供している。 ・各年次で定期的に個人面談を行い、生徒の進路希望を踏まえて、適切なアドバイスが出来ている。	・職業ガイダンスセミナーや企業訪問については、実態(社会の変化・ニーズ)に即した講座を設定し、働くことの意義を理解させ、社会との関わりの中で自己実現を目指すきっかけとする。 ・模擬試験の結果・分析を各年次に迅速に伝え、生徒一人一人の進路実現に向けて、教科指導、面談等に活かせるようにする。 ・個々の大学の最新入試情報や過年度の入試結果の分析資料を積極的に提供し、自ら進路選択ができる素地を作れるようにする。 ・進路の手引きを活用して、多様な入試制度や本校の進路状況など生徒・保護者が知りたい情報を発信できるようにする。
			生		3.5	A		
			保		3.4	B		
		5	教	本校は、将来について考え、進路目標を明確にするための情報が学校から提供されており、生徒の進路希望に応じた指導を行っている。	3.3	B		
			生		3.4	B		
			保		3.3	B		
生徒指導	生徒指導	6	教	本校は、いじめ防止基本方針に基づき、いじめの未然防止・早期発見に努め、いじめを許さない学校づくりに取り組んでいる。	3.4	B	・年間３回の「いじめに関する生徒調査」はもちろん、日々の生徒観察や個人面談、教職員間の情報共有がなされ予防的な対応が効果的に行われている。ただし、コミュニケーション能力の弱い生徒が増える傾向が続いており、望ましい人間関係の構築に苦勞をしている生徒への対応については工夫が必要である。	・HRや集会などでのいじめの未然防止の啓発機会を増やす。それ以上に、他者理解の深化による孤立感の解消がいじめの未然防止につながるとの観点から、生徒のコミュニケーション能力向上への取り組みを継続させる。 ・ICTでのいじめ調査など、新たな取り組みについての検討が必要である。 ・年次、年次外の垣根を低くし、組織的対応能力の強化を継続する。
			生		3.3	B		
			保		3.2	B		
		7	教	本校は、学校行事の内容が充実しており、学校生活を豊かにしている。	3.5	A	・各行事の実施については、生徒主体で実施することができ、多くの生徒が充実感、達成感の高まりをより強く感じる事ができた。 ・各行事、コロナ禍以前の内容に戻していく一方、熱中症への配慮をしながら、新たな視点で学習活動との両立を十分に考慮した行事の見直しが必要である。	・行事の出来栄のみならず経過も適切に評価し、充実感や達成感をより強く感じる事ができる自主・自発的な態度の育成に取り組む。リーダー育成の視点での働きかけが必要である。加えて、SSHやキャリア教育を含めた行事全体の見直し（改廃）に取り組む必要がある。
			生		3.4	B		
			保		3.4	B		

地域連携	特別活動	8	教	本校は、地域貢献活動やボランティア活動等への積極的な参加を促し、地域に奉仕する心を育成している。	3.1	B	・地域貢献活動については多くの活動においてコロナ禍前に戻ってきた。一方、ボランティア活動については姫路城の「お城清掃」は継続できているが、他の行事やイベントとの調整が難しく、昨年比で低調と言わざるをえず、その在り方についての検討が必要。	・地域貢献やボランティア活動についてはこれまでの実績に加え、主体的に考え判断し行動できる能力を育成する絶好の機会ととらえ、他の活動や行事とのバランスのとれた取り組みを探りながら、身近に参加できる活動について紹介する機会を増やしたい。
			生		3.2	B		
			保		3.3	B		
		9	教	本校は、生徒会行事の運営に関して、生徒会を中心にして、生徒が積極的にかかわる機会をつくっている。 本校は、生徒会行事の運営に関して、生徒会を中心にして、生徒が積極的にかかわっている。	3.3	B	・行事については、コロナ禍前に戻すだけでなく新たな発想を導入した内容で生徒会を中心に様々な工夫をして取り組むことができている。 加えて、それらの取り組みを保護者に観ていただけるよう改善をすすめた。	・生徒会行事への取り組みについては、中間の多様な個性や感性を理解し、独自の価値観を創造できる能力の育成を視点に、生徒会を中心にクラス、有志グループ等における自主自立の活動を呼びかけていく。特に、リーダーシップの育成の視点での取り組みを実践していきたい。
			生		3.3	B		
			保		3.3	B		
教育課程	学習指導	10	教	本校は、少人数や習熟別などのきめ細かい学習指導を行い、学習内容の定着に努めている。	3.4	B	No.10及び11ともに、昨年度とほぼ同水準の数値であり、また教員による自己認識と生徒・保護者における印象との間にもギャップは見受けられない。学習指導は高等学校における教育活動の要であるので、本項目の評価において内外の意識差が生じていないという点はひとまず安心材料と見なせるだろう。 しかし、次のようにも考えられる。「少人数」や「習熟別」は定量的な側面が大きい観点であるが、一方で「きめ細かい」という表現は定性的なものである。そのため、両者が接続されたNo.10の一文が示す状況を本調査の回答者が思い描くその時点において、そもそもの認識が攪乱されている可能性があるのではないかと。 つまり、「少人数」「習熟別」の授業が行われているという事実がそのまま「きめ細かい」という形容詞に直結させられることにより、「姫路東高校における学習指導を『きめ細かい』と評価してよいのか」ということが、回答者のそれぞれにおいて実はそれほど吟味されていない可能性があるのではないかと、ということである。 もしそうであるならば、3.3(3.4)という、低くはないが決して高いわけでもない数値を安心材料とすることは軽率妄動であると断じざるを得ない。 また、「学習評価が適切に行われていない」という事態はそもそも許容され得ないはずであり、そのように考えると、「『学習評価は適切に行われている』という言葉表に対する評価ポイントが3.3である」という結果はそもそも「良好」なのか「妥当」なのか、はたまた「不良」であるのか、その判断基準が途端に自明なものではなくなってしまう。 我々は、「評価アンケート」なるものが「端的に表現された一文を印象批評的に読み取ったインフォーマントによる脊髄反射的な回答によるもの」であるという可能性をつねに考慮し、数値という形に抽象化された結果に甘んじることを厳に慎まねばならないだろう。	「少人数」「習熟別」という形態的特徴に安住することなく、「きめ細かい」学習指導のあり方について議論と実践を繰り返し、熟練度を上げる。 また、恣意的な判断を排除し、公平な基準によって行われる学習評価の運用を徹底する。
			生		3.3	B		
			保		3.3	B		
		11	教	各科目の学習評価は適切に行われている。	3.3	B		
			生		3.3	B		
			保		3.3	B		
資質向上	教職員の資質向上	12	教	各教科、科目において学習内容や指導方法について研鑽し、授業改善や指導力向上に向けて取り組んでいる。	3.5	A	No.12においては「学習内容や指導方法について研鑽し、授業改善や指導力向上に向けて取り組んでいる」という教員視点の表現と、「教員は生徒の学力向上のために熱心に指導している」という生徒・保護者視点の表現との位相の差に、やはり留意せねばならないと考える。 どの程度「研鑽し、取り組んでいる」かについては教員自身の自己認識の反映であるが、「熱心に指導している」かどうかは生徒・保護者にとってそのように見える（感じられる）かどうかという感覚によるものであるため、ここに質的差異が存するからである。 立場の違いから同一事象に対する評価の多寡が発生しているということではなく、本項目の両者においては、そもそも全く別の事象がそれぞれ数値化されて並列しているものと捉えねばならない。 そのことを踏まえると、教員による評価と生徒・保護者による評価との間には、0.2ポイントという見かけ以上の懸隔を看取せねばならないと言えるだろう。	学習内容や指導方法についての研鑽や、授業改善や指導力向上に向けての取り組みを継続するとともに、生徒・保護者からどのように見られているかという視点を踏まえたセルフプロデュースの必要性について認識を共有し、その向上を図る。
			生	本校の学習指導は充実しており、教員は生徒の学力向上のために熱心に指導している。	3.3	B		
			保		3.3	B		

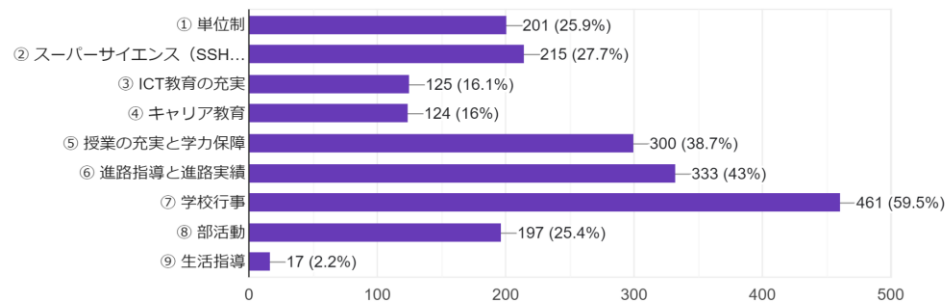
特色教育	SSH事業の活用	13	教	本校は、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業を活用し、幅広い教育活動を展開している。	3.7	A	・令和2年度にSSHに指定され、最終年度を迎えた。昨年度のアンケートと比較しても教員、生徒、保護者すべてで昨年度よりポイントが上がっていることから、SSH事業を理解していただき、有効に活用できた。 ・生徒アンケートによると、全学年のすべての項目で「効果があった」と答えた生徒が大きく増加している。特に学校の科学技術、理科・数学に関する取組は充実したという生徒が88％と大幅に増加している。	・課題研究に熱心に取り組んでいるがゆえに、発表準備が大変、部活動との両立が難しい、提出物が多いなど負担を感じている生徒が多い。どのように評価し、過度な負担があればどのように減らしていくのかについて議論をしているところである。
			生		3.6	A		
			保		3.5	A		
	課題研究	14	教	本校は、生徒が探究活動に取り組むことで、探究活動を通じて思考力・判断力・表現力を高める教育を行っている。	3.5	A	・昨年度のアンケートと比較しても教員、生徒、保護者すべてで昨年度よりポイントが上がっている。さらに生徒アンケートでは、SSHの取組に参加して最も向上した興味・姿勢・能力は、「未知の事柄への好奇心」、「協調性、リーダーシップ」、「成果を発表し伝える力」が多かった。	・「成果を発表し伝える力」が向上していると感じる生徒が多いが、「英語による表現力」や「国際性（国際感覚）」に対する効果を感じている生徒はいずれも50%未満である。SSH事業として、国際的な活動を掲げているので、世界に向けての発信力を高める必要がある。
			生		3.5	A		
			保		3.5	A		
安全管理	防災教育	15	教	学校は、防災避難訓練等を計画的に実施し、生徒の防災と安全に対する意識を高めている。	3.4	B	・年3回（①地震による火災発生 ②兵庫県津波一斉避難訓練 ③水害）の防災避難訓練を実施した。 ・事前にハザードマップや自宅近くの避難場所の確認や訓練後のICTを活用した安否情報の入力には防災意識を高めるのに有効であった。	・指定避難場所になっているため、実際の災害時に即応できるよう、より実践的な訓練の導入をしていく。 ・訓練後のフィードバックや改善点の共有を徹底し、次回の訓練に活かそうにしていく。
			生		3.3	B		
			保		3.3	B		
保健管理	保健・安全教育	16	教	学校は、日常的に感染症予防に努め、衛生的で、安心で安全な学校づくりをめざしている。	3.4	B	感染症予防については、昨年から引き続き手洗い励行、常時換気などを継続した。今年度はインフルエンザ、新型コロナウイルス以外の感染症も流行した。大きく拡がることはなかったが、感染症予防に対する意識が低下してきていると感じた。 保護者の評価については、学校行事に参加していただいている保護者については、理解していただいていると思っているが、目に見えてわかるような工夫が必要なのかもしれない。	感染症予防については、今後も保健だよりや、保健指導を通じて生徒に伝える。 衛生的に学校生活を送ることができるように、校内の美化についても強化したい。 職員間で情報を共有し、安心し安全な学校づくりをめざす。
			生		3.2	B		
			保		3.1	B		
人権教育	人権教育	17	教	本校は、教育活動を通じて命や人権を大切にする態度を育てており、生徒は安心・安全な学校生活を過ごすことができる。	3.2	B	・年次ごとのH.R.活動や行事を通して人権意識を高める機会を設けた。 ・外部講師を招いて身近な課題について考える機会を持つことで、広く社会に目を向けると同時に、生徒たちが自他への理解を深め、多様性を認め合う意識を高めた。	・教職員の人権意識のさらなる向上を目指し、生徒が安心して学校生活を送れるような環境づくりに力を入れていく。 ・今後も行事や講演会を充実させ、人権について考える機会を増やすことで、生徒たちが自他への理解を深め、多様性を認め合えるようにする。 ・生徒たちが行事やLHRを通して、自分と相手の命や人権を大切にする心を育てる環境作りができるよう啓発する。
			生	本校は、教育活動を通じて命や人権を大切にしており、生徒は安心・安全な学校生活を過ごすことができる。	3.4	B		
			保		3.3	B		

教育環境	I C T教育の導入	18	教	本校は、I C T機器を活用し、授業内容の充実や学習の効率化を図っている。	3.4	B	・全年次でBYOD端末が導入され、探究活動や各授業、ホームルームでタブレット端末の活用が進み、ICT機器の普及進いが進んだ。	・探究活動や各授業でのICT機器活用が進んでいるため、引き続き研修を通して効果的な活用について教員間で共有していく。 ・学校案内などを通して、ICT機器を活用した授業に関する情報発信を行う。 ・BYOD端末は年度ごとに最適な端末を選定し、保護者負担の軽減を図る。
			生	本校は、I C T機器を活用し、授業内容の充実や学習の効率化を図られている。	3.5	A	・県立学校の教育用クラウドサービスが更新されたことに伴い、タブレット端末の不具合が発生した。	
			保		3.3	B	・体育館のネットワーク環境も整備され、今後さらにタブレット端末の活用が進むことが予想される。	
国際理解	国際理解教育	19	教	本校は、国際交流の機会を提供し、広い視野で物事を捉えられる生徒を育成している。	3.6	A	・海外語学研修を実施し、2 年次生希望者 2 1 名がシドニー近郊のNepean Christian Schoolを訪れ、現地でホームステイを行った。	・英語力を高めるだけでなく、異なる文化や価値観を理解し、国際社会で主体的また協同的に生きていく力を伸長させるための機会を与えていく。 ・オンライン交流会やベンパル交流を継続的に行之、生徒が語学力やコミュニケーション能力を育成し、挑戦できる機会を与えていく。
			生		3.4	B	・西豪州バース近郊のKolbe Catholic Collegeの生徒とオンライン交流会を実施し、希望者 2 0 名が参加し、同年代の高校生と交流した。	
			保		3.4	B	・希望者 2 3 名が米国ボストンを訪れ、Biogen本社研究施設を見学したり、ハーバード大学研修プログラムに参加し、見聞を広めた。 ・南アフリカ共和国のPinelands High Schoolの高校生たちと英語でベンパル交流を継続的に実施している。	
環境整備	環境整備	20	教	学校の施設設備の管理がなされており、学習に適した環境が整備に努めている。	3.2	B	・昨年度から「部活動応援事業」による部活動備品等の整備、空調設備の充実、トイレの温水便座の設置等、計画的に教育環境の整備に努めているが、築年数の古さによる経年劣化が評価に反映しているように感じる。	・「部活動応援事業」により部活動備品の計画的な更新を行うとともに、本年度受け入れた遺贈金により、5年計画で老朽化設備等の更新を実施して行くこととしている。ICT環境の充実等、教育環境の整備に重点をおいた改修を行ってきたい。
			生	学校の施設設備の管理がなされており、学習に適した環境が整備されている。	3.1	B		
			保		3.0	B		
外部対応	案内・対応	21	教	来訪者への案内、外部からの電話に対し、丁寧でわかりやすい対応をしている。	3.4	B	・窓口や電話対応について、一昨年、昨年度に引き続きB評価を受けているが、来客対応、電話応対とも対応が浸透してきていると思う。	・明るさや丁寧さを全職員が意識し、相手の立場に立った接遇を心掛けるように周知徹底する。
			保	窓口や電話の対応は、丁寧でわかりやすい。	3.3	B		
		22	教	就学支援金や各種奨学金等の案内や、窓口手続きの説明は、わかりやすく丁寧に対応している。	3.4	B	・昨年度から授業料・諸会費引き落とし口座の登録方法、就学支援金の申請方法等、急激な事務処理方法の変更があり、保護者の方々に慣れない手続きをお願いすることが多かったと思う。	・就学支援金等各種手続きについて、事務室内で情報共有を徹底し、これまで以上に丁寧でわかりやすい説明ができるよう心がける。
			保	就学支援金や各種奨学金等の案内や窓口手続の説明はわかりやすく、丁寧である。	3.2	B		
組織	学校運営全般	1	教	各分掌が重点目標を掲げ、機能的な組織の編成や部署間の連携を図りながら、教職員が協働して目標を達成できるよう努めている。	3.3	B	・昨年度から0.1ポイント高くなっているが、各分掌の重点目標を意識した教育活動を進めるために工夫が必要である。また、各部署間の教員の異動もあり、年度当初は、主に専門部において職務の遂行に難を示したこともあった。来年度以降、各部主任を中心に、部署内、部署間、専門部と年次との協働を進めることが必要である。	・学校全体の教育力を上げるためには、教員一人一人のスキルを上げるだけでなく、組織として、各部署の力を上げていく必要がある。学校長のリーダーシップの元、平時においては、ボトムアップによる改善、緊急時には、トップダウンによるクライシスマネジメントができるよう、日々の教育活動に取り組んでいく必要がある。

【生徒】

19 本校に期待することを選択してください。（3つまで複数回答可）

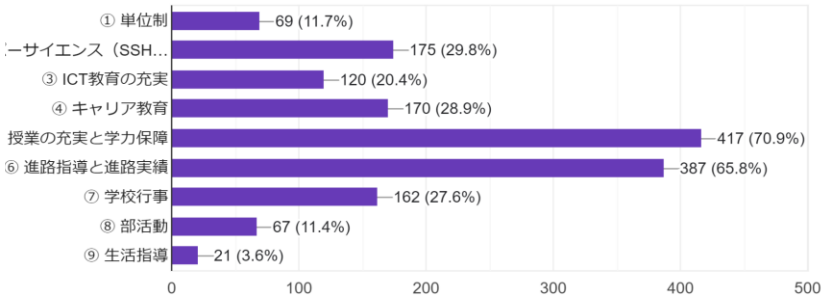
775 件の回答



【保護者】

本校に期待されるものをお答えください。（3つまで複数回答可）

の回答



領域	評価の観点	No.	実践目標	現状分析	今後の取り組み・改善策
年次運営	年次運営	23	1 年次 報告・連絡・相談によって、年次文化を構築する。	・保護者で大きく上昇した項目が「本校に入学させてよかった」であることはとてもうれしいことであるが、同時にこの期待に応えることに身が引き締まる思いである。だからこそ、厳しい意見にもしっかり耳を傾けさらなる向上に努めたいと思う。 ・生徒の「学校行事」への期待が高いが、やはりコロナ禍も過ぎさり、正常な高校生活に対するおける期待の現れが要因として考えられる。 ・生徒、保護者共に⑤授業の充実と学力保障⑥進路指導と進路実績の期待度が高い。 ・「教員の資質向上」について、教員・生徒に比べ保護者のポイントが低下していることが気になる。	・保護者の期待に応えられるよう、厳しい意見にもしっかり耳を傾け、さらなる向上に努めたいと思う。 ・生徒が期待する「学校行事」や「SSH」の取り組みの充実を図りながら、その充実が、人間的成長と学業への意欲につながるよう努めたい。 ・日ごろの小さな変化にも気を配り、年次通信や三者面談だけでなく、保護者と連絡を取ることで連携を深めるとともに、生徒一人ひとりの理解に努め、希望進路実現へもつなげたい。
			2 年次 生徒の知的探究心を充進し、進路意識を醸成する。	・昨年からアンケート結果に大きな変化はない。 ・①単位制と⑦学校行事について生徒と保護者の期待に差異がある。 ・生徒が期待する「単位制」が実態と乖離していないか、ガイドンスブックも含めて、不断に検証する必要がある。 ・生徒、保護者共に⑤授業の充実と学力保障⑥進路指導と進路実績の期待度が高い。教員の授業力を高めるために、研修や教材研究に注力できるよう、学校生活全般を見通した仕事のコントロールが必要である。また、入試制度が日進月歩に更新されていく昨今、生徒や保護者に対してはより一層きめ細やかな情報提供が必要である。 ・部活動に対する期待は、生徒は25%、保護者は11%である。部活動のあり方を再考すべきである。	・生徒が期待する「学校行事」や「SSH」の取り組みの充実を図りながら、その充実が、人間的成長と学業への意欲につながるよう努めたい。 ・年次通信や三者面談を通して、保護者との連携を深め、生徒の希望進路実現へとつなげたい。 ・アンケート結果を真摯に受け止め、3年次に向けて報告・連絡・相談を徹底したい。
			3 年次 生徒の進路実現に向けて、十分な支援を行う。	・保護者について、「授業の充実と学力の保証」「進路指導と進路実績」の2項目への期待が突出している。共通テストに「情報」が加わるなど、新課程初年度の入試であることから不安感の表れでもあると考える。年次通信を通じて、進路情報や入試までのスケジュール、勉強法など、時期に応じて情報発信を行ってきた。 ・「学校行事」に期待する生徒が多いが、東高祭の模擬店復活や体育大会での応援合戦の縮小など、限られた時間とさまざまな制約・条件の中で工夫を凝らし成功へと導いた経験は、充実感や満足感を得られたのではないかと考える。	- 学校行事や日々の学習などにおいて、結果だけではなく過程に目を向け、声掛けに努める。 - 生徒全員の進路希望実現のために、教職員一丸となって最大限取り組めるよう尽力する。